

与謝野晶子『新譯源氏物語』の文体の成立

佐藤 由佳

I はじめに

『源氏物語』は、日露戦争と第一次世界大戦に挟まれた時期、すなわち一九一二年から翌年にかけて、与謝野晶子⁽¹⁾の手により、初めて口語体による現代語訳がなされた。

『新譯源氏物語』全三卷四冊。金尾文淵堂。

「上卷」 (桐壺く乙女) 明治四五年 二月一日 (四六一頁)

「中卷」 (玉鬘く夕霧) 明治四五年 六月二五日 九二二頁

「下卷の一」 (御法く寄生) 大正 二年 八月二一日 一三五八頁

「下卷の二」 (東屋く夢の浮橋) 大正 二年 一月 三日 一八一九頁 (通し)

この晶子による『新譯源氏物語』は、版元を替えるなどしながら昭和一年までに単行本だけで一三種以上が出版されている。⁽²⁾その後は、晶子自身による二度目の現代語訳である『新新譯源氏物語』(昭和十三年一〇月く昭和十四年九月、全六卷、金尾文淵堂)が、やはり版元を替えながら陸統と刊行されることになるのだが、平成十三年一月には、『与謝野晶

子の新訳源氏物語」(全二巻、角川書店)が刊行されるなど、『新新譯』(以下、『新新譯源氏物語』は『新新譯』と称する)刊行後も『新譯』(以下、『新譯源氏物語』は『新譯』と称する)は、それと並行して、人々に読み継がれてきたのである。『源氏物語』の現代語訳は、晶子以後も吉澤義則、谷崎潤一郎、窪田空穂、玉上琢彌、円地文子、今泉忠義、瀬戸内寂聴、大塚ひかり、林望、中野幸一、角田光代などによって、それぞれの個性を生かした試みが現代に至るまで不断に続けられている。そのような状況の中で、晶子の『新譯』は、最新のものとして『与謝野晶子の源氏物語』(全三巻、角川ソフィア文庫)が平成二〇年に刊行されていて、現代の読者も身近に入手し得るものである。初版刊行以来現代に及ぶまで読み継がれている『新譯』の特質は、いかなるものであったのか。

まずは、晶子自身のことばに耳を傾けてみたい。『新譯源氏物語』(下巻の二)末尾に、「新譯源氏物語の後に」と題する、次の述懐が収められている。(私によりルビは省き、傍線および波線を付した。)

この書の譯述の態度としては、畫壇の新しい人人が前代の傑作を臨摹するのに自由模寫を敢てする如く、自分は現代の生活と遠ざかつて、共鳴なく、興味なく、徒らに煩瑣を厭はしめるやうな細個條を省略し、主として直ちに原著の精神を現代語の樂器に浮き出させようと努めた。細心に、また大膽に努めた。必ずしも原著者の表現法を襲はず、必ずしも逐語譯の法に由らず、原著の精神を我物として譯者の自由譯を敢てしたのである。

晶子は、自らの現代語訳について、次の四点を方法として採用したと述べているのである。

- ・ 煩わしい細部を省略した。
- ・ 細心かつ大胆に訳した。
- ・ 作者の表現法を踏襲しない。
- ・ 逐語訳をしない。

これらをまとめて、「原著の精神を我物」とした上で「譯者の自由譯を敢てした」と言っている。『新譯』は、必ずしも

原文に忠実ではないのである。

すなわち、『新譯』はいわば晶子の身体を通過した晶子だけの、言い換えるならば他に置き換えのできない、晶子独自の「自由譯」だった。あまたある現代語訳の中でも、その文学的喚起力において『新譯』が最も衝動的だと感じるのは、私一人ではあるまい。その理由の根源が、「この小説を味解する點について自分は一家の抜き難い自信を有つて居る」(前掲書)と自らが言うように、晶子自身の文学者としての強烈な個性に依拠していることは歪み得ない事実であらう。

とはいえ、後に『新新譯』で逐語訳の方針に轉換した晶子の『新譯』における文体の成立が、すべて文学者晶子の独自性によるものであったのだろうか。本稿では、この点につき、同時代の作家たちとの比較を通して改めて考えてみたい。

II 『新譯』の「桐壺」巻頭部の特質

いつの時代であつたか、帝の後宮に多くの妃嬪達があつた。この中に一人陛下の勝れた寵を受けて居る人がある。この人は極めて権門の出身と云ふのでもなく、また今の地位が後宮においてさまで高いものでもなかつた。多くの女性の嫉妬がこの人の身邊に集るのは云ふまでもない。この人よりも位置の高い人はもとより、それ以下の人の嫉妬は甚しいものであつたから、この人は苦しい、悲しい日を宮中で送つて居た。その上よくよと物思ひばかりをする結果病身にさへなつた。陛下は二十になるやならずの青年である。戀のためには百官の批難も意に介せられない、いよいよ寵愛はこの人一人に集るさまである。この人も百万嫉視の中に陛下の愛一つをたよりにして生きて居る。(『新譯』「桐壺」巻頭部)

この訳文の特質を明らかにするにあたり、比較の基準として『源氏物語大成』(池田亀鑑『源氏物語大成』(卷二)「校異篇」昭和二八年六月二五日 中央公論社)を、次に掲げる。今、仮にこれを原文として扱うこととする。

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなき、はにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方くめさままじきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちほましてやすからずあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよくあかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは、からせ給はず世のためしにもなりぬへき御もてなし也かんとちめうへ人なともあいなくめをそはめつ、いとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやうくあめのしたにもあちきなる人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとほしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

両者の比較をとおして、大きく次の九点が相違として確認できる。以下、『源氏物語大成』は『大成』と称する。

一、文字数

『大成』 三八六文字

『新譯』 二九三文字（句読点一五字を除く）

二、文の数

『大成』 六文

『新譯』 九文

三、漢字の使用

『大成』 三九文字

『新譯』 一〇一文字

四、敬語の使用

『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）

『新譯』 なし

五、文脈

『大成』 （原文のまま）

『新譯』 入れ替えあり。

六、文体

『大成』 （原文のまま）

『新譯』 文末を「だ」「である」の常体とする。

七、『大成』には見られず『新譯』のみに見られる用語・表現等の存在

『新譯』 傍線部

八、『大成』にはありながら『新譯』に訳出されていない用語・表現等の存在

『大成』 傍線部

九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在

『新譯』 波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、晶子の『新譯』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができよう。

一、逐語訳ではなく内容が圧縮された要約である。

二、原文の六つの文を九つの文に分解・再構成することにより、文意が明快。

三、表意文字である漢字の多用により、文意が明快。

特に二字熟語の多用（何時・時代・後宮・妃嬪・一人・陛下・権門・出身・地位・女性・嫉妬・身邊・位置・以下・

宮中・結果・病身・二十・青年・百官・批難・寵愛・百方・嫉視）は、大きな特徴と言える。

四、敬語の省略により、文意が通じやすい。

原文は、主語が明示されずとも敬語により主語が明らかになるのだが、敬語を省略した一方で、『新譯』は九文中八文において主語を明示している。

五、文脈を前後入れ替えることにより、文意がたどりやすい。

例えば、「いとやむことなき、にははあらぬかすくれて時めき給ありけり」（『大成』）という一文について、内容を二分割し前後を入れ替え、二つの文に分けて「この中に一人陛下の勝れた寵を受けて居る人がある。この人は極めて権門の出身と云ふのでもなく、また今の地位が後宮においてさまで高いものでもなかつた。」（『新譯』）とするが、これにより「寵を受けて居る人」の存在（根幹）がまず提示され、次に、その身分（枝葉）という付帯要件が後者におかれることになる。この配置により、文意が明快。

六、文末を常体（「だ」「である」調）で括ることにより、簡潔かつ緊張感のある文体としている。⁴

七、必要な文脈を補い、または、まったく新たな要素を加えて文意・状況を明快にしている。特に、「陛下は二十になるやならずの青年である」は、原文には全く存在せず、訳者の読みおよび考察の結果、導き出されたものである。

八、原文の文言の省略、または概括により、文意が通じやすい。

大きな省略箇所としては、「楊貴妃」の逸話を削除している点が挙げられる。これは、本筋には関係なく、結果のみを記述すれば、無くても文意は通じるであろう。

九、皇子独自の解釈による補足等が行われ、文意が通じやすい。「はしめより我はと思あかり給へる御方くめさましきものにおとしめそねみ給」を「多くの女性の嫉妬がこの人の身邊に集るのは云ふまでもない」と訳すことにより、「めさましき」感情が「嫉妬」であることを明快に示している。

右に見るとおり、晶子『新譯』は、原典である『源氏物語』を自家葉籠中の物として取り込み、さらに換骨奪胎し、自由闊達に（当時の）現代語に翻訳した「自由譯」であったことが改めて確認できるのである。

しかし、ここで敢えてその訳文の内容ではなく、形式に着目した時に、さらにどのような特質が導き出させるだろうか。右にあげた九つのうち、特に「二」「三」「六」を取り上げて検討してみたい。

Ⅲ 同時代の文学作品との文体比較

ここで晶子の『新譯』の文体について、前節で挙げた特質のうち、きわめて分かりやすい視覚の観点（「二」「三」および「六」）から、次の点を立項して同時代の文学作品と比較してみることにする。

1. 漢字の字数 一〇一字（33%）

2. 熟語（固有名詞は除く）の語数 二四語（重複は除く）

3. 文の数 九文

4. 文末表現 「だ」「である」調

比較対象は、作品始発箇所から三〇八字（前掲『新譯』「桐壺」巻頭部の、句読点を含んだ字数）までの冒頭部とする。字数の統一の観点から段落を取り払い、見やすさを優先するためルビを取り払った。また、漢字の熟語（固有名詞を除く）に傍線を付した。

対象作品は、与謝野晶子と生年月日が近い作家のもので、明治四五年から大正二年にかけて刊行された『新譯』と刊行年月日が近いものとした。

【女性作家】

①長谷川時雨^⑤

「雲」^⑥

誠二が都を出たのは、春は根に歸つて、熱烈な夏の生活に入らうとしながら、床しかつた昨日の、見果ぬ夢を慕うて煩悶して居る、四月の末の雨の日であつた。雨にかゝると埋れて居た花の塵が、蒸れてにほふインバネスを引かけて、上野驛を出發した夕暮、本郷臺から山下へ突きると、不忍池の附近では、氣の早い初裕の瀟洒な蛇の目傘にも行きあつた。見捨て、ゆく忍が岡は、新緑の装になつて、生々した女の何處かに濕つた面影がある。誠二の父親は、株式界の方の人であつたのに、其中でも豪放といつた性なので、其生存のうちには、玄關も中の口も、まして勝手口は訪來る人が絶なかつた。廣い水口に敷詰た御影石は乾いた事がなかつた。ぬぎすてた上草履の鼻緒にも、襷の配

1. 漢字の字数 一二三字 (40%)

2. 熟語の語数 二四語

3. 文の数 五文

4. 文末表現 「だ」「である」調

②森しげ^⑦

「おはま」^⑧

世田ヶ谷村の別荘に八重子は寂しい月日を送つてゐる。別荘は頃日落成したばかりである。最初座敷の格天井に、父が好みで画工に誂へて、金地に花鳥を極彩色でかかせたところが、どう間違つたか、二三枚足らないで、穴になつてゐた。八重子はその一枚に、画の先生に勧められて、蓮の花をかけた。父がそれを見て、蓮は実の多いものでめでたいと云つた。丁度八重子の縁談の纏まり掛かつた時であつたので、さう言つたのである。併しそれは空頼みであつた。

そのうち落成した別荘の、今八重子がゐる間の次の間には、新しい箆筒長持、塗り立ての衣桁、櫛台手箱、文箱など、皆光るやうに新しいものばかりが置いてある。併しこれは未来を夢みてゐる道具ではなくて、過去を語

1. 漢字の字数 一一六字 (38%)

2. 熟語の語数 二四語

3. 文の数 八文

4. 文末表現 「だ」「である」調

漢字の字数については、『新譯』本文の漢字字数の多さに、現代を生きる我々は等しく一驚するところだろうが、この比較によれば、同時代の女性作家二人はいずれも晶子の漢字使用数において勝っているのである。また、三作品は熟語の数が全く同じである。

一方、文末が常体である点は、三者に共通する。

文の数については、晶子が幾分多いということになり、あえて言えばこのあたりに晶子の独自性を見ることができそうでもある。

【男性作家】

①永井荷風

「すみだ川」⁽¹⁰⁾

何かの用事で今年の盆にはとう／＼行かずにしまつた處から、俳諧師の松風庵蘿月は今戸で常盤津の師匠をして居る實の妹をたづねて見たいと毎日さう思つてゐた。けれども流石日さかりの暑さには家を出かねて、夕方の來るのを待つ。夕方になると竹垣へ朝顔をからました勝手口で行水をつかつた後其のまゝ、眞裸躰で晩酌を傾け、やつとの事で膳を離

れるので、七月の黄昏も家々で焚く蚊遣りの烟と共にいつか夜になつて、盆栽を並べて簾をかけた窓外の往來に下駄の音、職人の鼻歌、人の話聲が賑に聞え出す。蘿月は其から直ぐに今戸へ行くつもりで格子戸を出るけれど、其の邊の涼臺から聲をかけられるがまゝに腰を下すと、「一杯機嫌の話好きに、いつも極つて八時か九時の時計」

1. 漢字の字数 一二六文字 (41%)
2. 熟語の語数 二九語 (重複は除く)

3. 文の数 三文

4. 文末表現 「だ」「である」調

②有島武郎

「幻想」

彼れは或る大望を持つてゐた。生れてから十三年の無覺醒な時代を除いては、春秋を迎へ送つてゐる中に、その不思議な心の誘惑は、元來人なつくく出來た彼れを引きずつて、段々思ひもよらぬ孤獨の道に這入りこました。ふと身のまはりを見返る時、自分ながら驚いたり、懼れたりするやうな事が起つてゐるのを發見した。今のこの生活——この生活一つが彼れの生くべき唯一の生活であると思ふと、大望に引きまはされて、移り變つて行く己れ自身を危ぶんで見ないではゐられないやうな事もあつた。根も葉もない幻想の翫弄物になつて腐り果てる自分ではないか。生活の不充實から來る倦怠を辛うじて逃げる卑劣な手段として、自分でも氣付かずに、何時の間にか我れから案じ

1. 漢字の字数 一一三字 (37%)

2. 熟語の語数 二二語 (重複は除く)

3. 文の数 五文

4. 文末表現 「だ」「である」調

有島武郎については、各項目とも同世代の女性作家と大差はない。永井荷風については、その文の数が少ないことならびに漢字の字数と熟語の多いことに気づかされる。

しかし、四つの比較項目全体を概観するなら、同世代の男女間において、明らかな差異は見出し難いということになる。つまり、晶子も、この時代の潮流と無縁ではなかったということが確かめられよう。漢字の頻出、熟語の多用、常体による文末は、必ずしも晶子の独創ではなかったのである。

IV 明治期の翻訳文学作品との文体比較

次に、晶子が読むことが可能であったであろう翻訳文学作品と『新譯』の文体とを比較してみたい。対象作品は、『新譯』刊行以前に、他言語作品を翻訳した小説とする。

比較の範囲は、同じく作品冒頭から三〇八字までとし、前節と同じ処理を施した。

【女性による翻訳作品】

①若松賤子¹³⁾

「ローレンス」¹⁴⁾

自分は彼の嬢に愛されて居ないと承知しては居り升たが、戀仇がありと知らぬ中は起居安穩やかに、戀愛が苦痛とは化しませんかつた。性質は極く謙遜で、自ら敬虔の風が備はり、尤も開闊、豪毅で、物事に屈し臆する處なく、天地の樂しき方面を見るたちでした。それ故始めて彼の嬢に出逢ひ升た時一度かふと觀察を下して、あとは甚だ敷心に恥ぢ升たどうぞもつと立派な人間になり度と思ふにつけ、既往に拭ひ消し度ことなどが多く出來升た。これは塵に穢れ

ぬ純白な姫百合の美しき、可愛らしさが壯年の理想を高めて、清く尊きことを慕ひ、渴望する様に且つ一方より己が歩まねばならぬ世の姦悪なるを思ふて隠かに恥らう様に導きたい故でした。嬢の如き潔きものには世の塵隈

1. 漢字の字数 一二三語 (40%)

2. 熟語の語数 二八語

3. 文の数 四文

4. 文末表現 「です」「ます」調

②瀬沼夏葉⁽¹⁵⁾

「六號室」⁽¹⁶⁾

町立病院の庭の内、午房、葦草、野麻などの簇り茂つてゐる邊に、小やかなる別室の棟がある。屋根のブリキ板は錆びて、烟突は半破れ、玄關の階段は粉聖が剥がれて、朽ちて、雜草さへのびくと。正面は本院に向ひ、後方は茫廣とした野良に臨んで、釘を立てた鼠色の塀が取繞されてゐる。此の尖端を上に向けてゐる釘と、塀、さては又此の別室、こは露西亞に於て、たゞ病院と、監獄とにのみ見る、儚き、哀な、寂しい建物。葦草に掩はれたる細道を行けば直ぐ別室の入口の戸で、戸を開けば玄關である。壁際や、暖爐の周邊にて病院のさまざまの雜具、古寐臺、汚れた病院服ほるほろの股引下、青い縞の洗浚しのシャツ、破れた古靴と云つたやうな物が、ごたくさと、山のやう

1. 漢字の字数 一二八字 (42%)

2. 熟語の語数 三一語 (重複は除く)

3. 文の数 五文

4. 文末表現 「だ」「である」調

両者は、「同世代の女性作家」および晶子に比して、熟語の語数がやや多い程度であり、漢字の字数および文の数について

ては、同世代の女性作家とほぼ差異は認められない。つまり、女性翻訳者の文体との比較においても、晶子の独自性は認め難いのである。

なお、若松賤子は、「です」「ます」調を採用しているのが他に相違する。

【男性による翻訳作品】

① 森鷗外⁽¹⁷⁾

「いつか君は歸ります」⁽¹⁸⁾

「群の鷗が丁度足許から立つて、鋭い、貧るやうな聲で鳴きながら、忙しく湖水を超えて、よろめくやうに飛んで行つた。空氣は雪を孕んでゐて、英風園の木立の上を雲が喘ぐ。風は憎みを以つてぶつつかるやうに顔を吹く。どうして道を歩いて居るんだか、我ながら不思議なやうに思はれる。心は鈍い驚きに滿されて居る。ふと自分で自分の歩く足の數をかぞへ、又路ばたの木立の木の數をかぞへて居るのに氣がつく。木は一本々々ゆつくり通り過ぎる。十五、十六、十七。もう殆んど歩けないと思ふ時、腰掛があつた。腰を掛けると旋律が耳に響く。優しい、哀れげな旋律である。さうして其旋律はまたと耳を離れない。旋律は靜に自ら押へるやうな調子に響いて來る、人を眠らせ

1. 漢字の字数 一〇八字 (35%)
2. 熟語の語数 一五語 (重複は除く)
3. 文の数 一一文
4. 文末表現 「だ」「である」調

誰のでも無い、名も付いてゐない、寒さの強い永い冬を何處で過すのやら、何を食べて生きてゐるのだから。空腹じい事は同じでも、主人持を自慢にして威張つてゐる他の犬どもは、此犬を暖かい薬屋に寄付けなかつた。饑に迫つたり、又は自づと類を求める心に驅られて、街へ出て行くと、子供達には石を投げられる、大人は勢宜く呼んで呉れるが其長く曳張つた口笛の怕ろしさ。犬は度切粉して路の兩側を彼方此方、垣根には突當る、往來の人には衝突かる。いつも終は村端の廣い庭の奥豫てよく知つてゐる隅へ逃げて行く。其處で傷痕や怪我の處を舐めながら、じつとして居ると恐怖と、憎悪とは心頭に萃つて來る。唯一遍、可愛がつて呉れた人があつた。酒舗から出て來た泥酔の

1. 漢字の字数 一二四字 (40%)

2. 熟語の語数 二一語 (重複は除く)

3. 文の数 七文

4. 文末表現 「だ」「である」調

二人の文体の共通点は、熟語の数が少ないということであるが、それぞれに即してやや詳細に見るなら、次のような特徴が見いだせよう。

森鷗外は、漢字の字数が少なく、それに伴つて熟語の語数も減少していることに気づかされる。一方、文の数が他の作家に比し突出して多い。この漢字の字数が少なく、文の数が多という結果は、晶子の傾向と同じである。

上田敏は、漢字の字数がやや多めであるが、一方で熟語の語数はやや少ない。これまで見てきた作家たちの場合、漢字の字数の多い場合は、熟語の数もそれに伴い多くなる傾向があるが、それに反した結果となつている。また、漢字の字数の多い作家は文の数が少ない傾向にあるが、それにも反している。

【翻訳と「新譯」の文体】

これまで、晶子を含む九人の作家たちの形式的文体の特徴について見てきたが、森鷗外と晶子との間には共通する点が多く、一例として鷗外に突出して多く見られる「文の数」に着目するならば、森鷗外（一一）、晶子（九）、森しげ（八）、上田敏（七）、長谷川時雨（五）、有島武郎（五）、瀬沼夏葉（五）、若松賤子（四）、永井荷風（三）となる。男性二人の翻訳文体は、比較的「文の数」が多い（平均六・三）傾向にある。

明治四四年に刊行された晶子による随筆集『一隅より』（明治四四年七月二〇日、金尾文淵堂）には、興味深い記述を見ることが出来る。（ルビは、私により省いた。）

・・・歌を詠み初めた計りの人は見當の分らぬ事が多く、其れが歌として發言せねばならぬ情想であるか何うか、又何う云ふ具合に言ひ廻せば感じた通の情想が調子よく出せるか、斯う云ふ内容や技巧に就いて中々自信がない。其れで已むを得ず他人の作を読んで其遣口を模倣し、模倣し乍ら少しづつ自分の感じた事を出さうとする。習作¹の手段として此模倣と云ふ事は誰も一度通過する事の様に思ひます。

併し悪くすると模倣が癖になつて、何時迄も他人の作物の影響を受け他人の後塵を拜して計りある弊害がある。・・・例へば他人の手本で習字するのは模倣であり、其習字の目的は自己の立派な書體を作るにある如く、歌の模倣も目的たる自己の歌を完全に製作する迄の稽古である事を忘れてはなりません。

（中略）

・・・私は男の方の様に旅行などで見聞を擴める具合にも行かぬ。又外國の詩歌小説が一行でも讀めるのでは無い。其れで自分の内心を豊富にする爲には、力めて宅へ來られる先輩や友人方の御話を注意して聴く。氣を附けてゐると不用意な御話の中にも私の胸に思ひ當る事が少なくなないので大變に得をします。

（中略）

私はどちらかと云ふと、幼い時から歴史に關した書物が第一の嗜好です。其れで自然早くから日本の古文學にも親みましたが、只今では動植物の書物でも如何なる雜書でも手當たり次第に讀みます。文學物では脚本と小説、殊に森先生などの御譯しになる翻譯を讀み耽ります。

ここから讀み取れることと推察できることを列挙する。

1. 詠歌に際し、初めは模倣でもかまわない。
2. しかし、模倣は、自身の作品を確立するための稽古である。
3. 見聞を広める旅は女の身では困難である。
4. 外国語は読めない。
5. 男たちの会話の中から知識を吸収する。
6. 耳学問により、自らの正統性を確かめる。

ここで重要なことは、波線部、「殊に森先生などの御譯しになる翻譯を讀み耽ります」という事実である。晶子は、自身がか全く読めない海外の文学作品を翻訳によつて讀んでいる。翻訳の文体に馴染んでいるのである。日本の古典と西洋の作品という違いはあるにしても、原典を現代語に移し換える作業という点では同一である。

晶子の二回目の訳業である、二七年後に刊行された『新新譯源氏物語』の「あとがき」に次のような文章がある。(ルビは、私により省いた。)

・・・森林太郎、上田敏二博士の序文と、中澤弘光畫伯の繪が添つて居た。その三先生に對して粗雑な解と譯文をした罪を爾來二十幾年の間私は恥ぢ續けて來た。いつかは三先輩に對する謝意に代へて完全なものに書き變へたいと願つてゐたのであるが・・・

晶子の論理によれば、初めは「模倣」でも構わない。究極的には自身による確立が実現されればよいのである。晶子の

訳業は、西洋文学の翻訳文体の「模倣」から始まったといえるのではあるまいか。

ところで、上田敏の翻訳の特徴について、塚原孝氏は、「上田敏とアンドレーエフ——その翻訳を中心に——」（川戸道昭ほか編『明治翻訳文学全集《翻訳家編》17』『上田敏集』平成一五年七月一七日 大空社）で、二つの指摘を行っている。

一つ目は、会話文についてである。上田敏の翻訳には、「……地の文から次の会話、次の地の文からその次の会話、さらに最後の地の文から次の会話が、読点で接続されている」「……会話文の直前の地の文とそれに続く会話文を、ある場合には地の文にあつた動詞をまつたく取り除いてしまつて連続させる……」という特徴があるとする。

また、二つ目として、「原文およびフランス語訳とこの上田敏では、文の数が異なっている」ことを挙げ、アンドレーエフ作『沈黙』の一部分を、宮原晃一郎による逐語訳と比較することによって、次のような訳出方法上の特徴があるとしている。

上田敏のこの訳は、文章の頭から順に訳出し、いわゆる句読点に関しては比較的自由な裁量の下に置かれた結果であるといつてほぼ差し支えないと思われる。つまり、上田敏の訳は、文の語彙、前後の脈略は大きく変えられていないであるが、このような箇所もまた、明らかにそこに訳者である上田敏の意図が感^びられると同時に、ごく限られた箇所というよりは、至る所に見られる表現として、その訳文の特徴を成す要素となつているのである。

塚原氏の指摘する上田敏の訳出方法は、そのまま晶子の『新譯』に見る方法にびたりと符合しているかのようである。文脈を大きく変えることなく、自らの裁量により敬語などを取り払い、まわりくどい長文を適宜区切り、文脈上取り払つても差し支えない部分を取り払うなどして再編された晶子の現代語訳（前出の「一」「四」「五」「七」「八」「九」）は、鷗外や上田の訳に慣れ親しんでいた彼女にとつては、ごく自然なものだったのである。

『源氏物語』の現代語訳については、明治二十一年、増田于信による『新編紫史 一名通俗源氏物語』が文語体（通俗語）で

刊行されているものの、口語体においては晶子が初の試みとなる。自身が読んだ『源氏物語』を口語体で訳出するにあたり、当時盛んにおこなわれていた西洋文学の翻訳を参考にしたことは十分に考えられるのではないか。

『新譯源氏物語』に見られる独自の文体すなわち晶子の「自由譯」は、他に置換できない文学者晶子の強烈な個性に基づきつつ、もう一方では、同時代の男女を問わない文学者たちの潮流と、同時に翻訳者たちの文体とが相俟って成立したと言えるのではないだろうか。

注

- (1) 明治一二年二月七日、大阪府堺市に誕生。昭和一七年五月二九日没（六五歳）。
- (2) 佐藤由佳『源氏物語現代語訳書誌集成』（令和二年九月二日 新典社）
- (3) 晶子が現代語訳を行うにあたっての依拠本文について、晶子は、それを明示していない。それを一つに確定することは難しいものの、最も愛読したのが「絵入源氏物語」無刊記小本（江戸初期）である可能性が高い。（以上、神野藤昭夫氏のご教示による（平成二八年一二月九日、愛知淑徳大学における「晶子源氏」誕生秘話」と題する講演）。
- (4) 中野幸一氏は、元来が「語り」であることを重視して、文末を「です」「ます」で括る。『正訳 源氏物語』（全一〇巻）（平成二七年一〇月〜同二九年六月 勉誠出版）
- (5) 明治一二年一〇月一日、東京市に誕生。小説『雲』は、明治四一年九月に『文藝倶楽部』に発表。昭和一六年八月二二日没（六三歳）。
- (6) 瀬沼夏葉（明治文學全集82）『明治女流文學集（二）』（昭和四〇年二月一〇日 筑摩書房）による。
- (7) 明治一三年五月三日、東京市に誕生。明治三五年二三歳の時、森鷗外の後妻として再婚。「おはま」は、明治四四年八月一日に『新小説』に発表。昭和一一年四月一八日没（五七歳）。
- (8) 大塚楠緒子『新編 日本女性文學全集』（第三卷）（平成三〇年一月二七日 善柿堂）による。
- (9) 明治一二年一二月三日、東京市に誕生。『すみだ川』は、明治四四年初山書店から刊行。昭和三四年四月三〇日没（八一歳）。

- (10) 永井荷風《明治文學全集73》『永井荷風集』（昭和四四年二月二五日 筑摩書房）による。
- (11) 明治一一年三月四日、東京市に誕生。「幻想」は、大正三年八月に『白樺』にて発表。大正一二年六月九日没（四六歳）。
- (12) 有島武郎『有島武郎全集』（第一巻）（大正一三年四月五日 叢文閣）による。
- (13) 元治元年三月一日、現在の会津若松市に誕生。インジロー作の小説『ローレンス』は、明治一六年に『女学雑誌』に掲載。明治二九年二月一〇日没（三三歳）。
- (14) 川戸道昭ほか編《復刻版 明治の女流文学 翻訳編 第一巻》『若松賤子集』（平成二二年七月二八日 五月書房）による。
- (15) 明治八年二月一日、現在の群馬県高崎市に誕生。紅葉と共同でトルストイの『アンナ・カレーニナ』などを発表。チェーホフ作品を多数翻訳している。「六號室」は、明治三九년에『文藝界』に発表。大正四年二月二八日没（四一歳）。
- (16) 川戸道昭ほか編《復刻版 明治の女流文学 翻訳編 第二巻》『瀬沼夏葉集』（平成二二年九月二八日 五月書房）による。
- (17) 文久二年一月一九日、現在の島根県津和野町に誕生。外国文学の翻訳、翻訳戯曲や翻訳詩、評論なども手掛けた。『新譯』の序文を記す。ルスト著『いつか君は歸ります』は、与謝野鉄幹主宰の雑誌『明星』に明治四一年に発表。大正一一年七月九日没（六一歳）。
- (18) 川戸道昭ほか編《明治翻訳文学全集《翻訳家編》9》『森鷗外集Ⅱ』（平成一四年六月二三日 大空社）による。
- (19) 明治七年一〇月三〇日、東京市に誕生。与謝野鉄幹主宰の雑誌『明星』にも作品を発表。『新譯』の序文を記す。アンドレーエフ作の小説『クサカ』は、明治四二年『新小説』に発表された作品。大正五年七月九日没（四三歳）。
- (20) 川戸道昭ほか編《明治翻訳文学全集《翻訳家編》17》『上田敏集』（平成一五年七月一七日 大空社）による。

※年齢表記は数え年とした。

（博士後期課程）